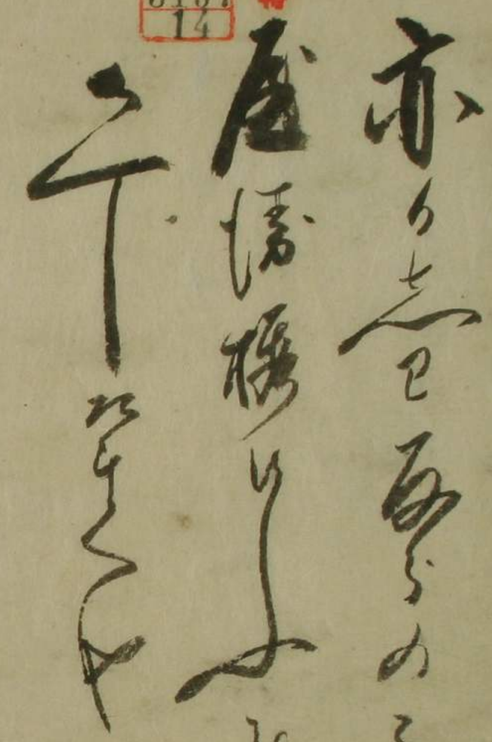
開卷驚奇俠客傳　第三集

金　四

へ13
3157
14

3157
14



當館
金長

開巻驚奇侠客傳第三集巻之四

東都　曲亭主人編次

第二十七回　縫殿自焼〻く楼を飛ぶ　安次死を送りて生ゆ會ふ

犬形ゆ吠ると云へ群犬聲ゆ相従ふ虚実の間ゆ惑ひの。世ゆヨマろ習俗ゆあるれば。縫殿へ既ゆ彼岸ゆ報も知せ〻京師の凶変剣里の風聲の這那符節を入ヨせ〻ぞく。疑ふべくもあらぬれば這里も緝捕使と向られんその折ゆ潔く死ゆ[illegible]覚期とても言ゆ出さびるぞ知〻で生ゆ黄縁る垣衣と枚人輿ゆ倚[illegible]院へ央鍼妙安ゆ[illegible]と垣衣つらくら吟て寔ゆ不思議のあんそれ〻御尼會ゆ[illegible]

[illegible]

こゝ左ゆも右ゆもあんに計人ゆ道遇へ〻とゆ[illegible]ねど縫刺の技へ[illegible]拙く[illegible]御寺へ参〻ても尼御寺さゆのれ〻ろゆ稱ぶゆ爭何いせん。と弊ふと縫殿へ吟あ[illegible]

がまり足事あれば大槌の舊衣の解洗ひのまゝ。やうち儘にあり。とろろ汁に推薦めそ立ものそ江納戸より會出し來る亘れ。昨夜悔を地に准備とあるを亡君上[illegible]夫妻の木主菊水の旗金銀まで藏めしを傍に措き。後方に居る一箇の衣箱を[illegible]指示して南垣衣刀祢這内に夏冬の衣裳箇数あるを感ん身まわらせん小雪妻時でも他に宿に歌る便りのれば涼に朝暑に日に隨意合せて被る。又這亘に要る東西に復市が[illegible]共に御寺へ[illegible]。知圓禪尼に徒と告稟して預けまゝ[illegible]。臂近に措べ。這[illegible]そ[illegible]然氣もなく誂て情由有繋に石倉の媳婦と呉へ後の事逆てそ憑む苦[illegible]限に復あと紀念贈りの憂涙衣も包み隨に四に揖て色に知まど名に[illegible]縫殿に引て垣衣深に情に感涙を拭ひ[illegible]額に過世甚麽に罪障に幸[illegible]て流離より今[illegible]夏の草枕這里に旅宿へきのけ[illegible]剛涙も[illegible]奴家に[illegible]

宜いで御寺へ寓さ[illegible]御恩に[illegible]衣に賜へ[illegible]功に[illegible]。その義に免[illegible]と推辞に听ぎ頭を掉て。そに無[illegible]口誼に[illegible]這衣箱の内に我少に時被舊て今に要る東西に[illegible]。身の素生も流寓の情由も問へさ[illegible]がそ[illegible]真に知られども絶て久に復市に伴れて來て[illegible]人に[illegible]徒に[illegible]隔もわ[illegible]駝に遣そ[illegible]と垣衣に[illegible]固辞難て。その欲びを舒に[illegible]縫殿に然て[illegible]と黙頭て寫措そ[illegible]書一通と住持并に同宿の比丘尼達へ[illegible]包狀布施に阿弥陀の御[illegible]の糸撚て願に白楮線に見布尉に手添て拵へ[illegible]折敷と俱に推裹む單袱兒の隅に[illegible]折返て[illegible]餘に[illegible]。[illegible]屋敷に夜の物[illegible]。[illegible]臺這那と婢妾毎に[illegible]に[illegible]端近く出て。却農僕一両名に喚[illegible]詞急迫く吩咐で身壯衣せ垣衣に卒とむに[illegible]會釋を[illegible]又改めて告別盡に[illegible]垂れに露に脆に涙を拭に人の情と形に[illegible]身の不樂に[illegible]立難に垣衣に[illegible]縫

殿の胸の鍼刺を心地して泣くと云ひ生憎の悲しみの瀬を渡りて人の目送る程の農僕共の搭駝に抗る衣箱小包大裏袋背に載せて引提げて去向を右へ左へと聲を掛つて垣衣の後に跟て六道の岐路に孰も一走能化貌を似而非引接の地獄の持る如意宝珠女僧院投ていそがける桜を折る俳諧師鬼貫が雛雀の幾句あり作得て いとく佳其句ハ人の親は烏追ひけり雀の子夫俳諧の巴人の短曲絶ハ十有七言るれども人の情を穿つとかの如くまで至れるあり。あるを見縫殿が必死の覚期を今垣衣と半一遣るあるを人の親は鴉を追ふ類なるべし。間話休題。徒而這日の黄昏時候に垣衣を送りて農僕共が帰去りて縫殿が身邊を赴いて宝珠院の障のもとに歓び那女中を留めれいたく那里の口状綽の容子を箇様々々と報知し住持の回翰を遞與しかれば縫殿が受とり早速見て心安しとなりぬ。その甲夜の間に奴婢農僕を送り奥に召聚て潜ませ示さるる旨なる欲今番姫上京師あり。徒々の事あるを聞されさせゆゑ折我所天も亦その途を命果敢なくなりけんと曩に彼岸一の報ふる世の風聞耳へ吻口合して凝ぶべもあらぬ縫捕使を向られ然かるを謀ぐべきその期に及び汝達に早く家に火を放て何里へとも身を隠れ各々奴婢の帰るを他郷走らんそぶ俄に後難を免るべし。因て吩咐ることあれ。彼岸二の明日は旦開より京師の三半里餘りも日毎に出て遠見とあり。縫捕使向と知るるを走還て快報を這外に亦誰もあれそろるるの一両名接佐殿の城の頭へ潜ませ那里の動静を覘ふべ城より縫捕使を出されば火速の注進緊要と送れるの火草を採集め准備して雑譚多言をべ各々これを腰に纏ひて期に及び立退く折れ盤纏せるべ東西そこの人別に金三両と銭壹貫文を入るせけり。大家これをうけ聴て且敬焉に且感る面を照水共侶に嗟嘆して額をうなづて宣ふ趣を来アあその期に及び我々に煙に紛れて逃もせん。死身は何里へ走るせのふ俱にのるべ。あん伴せんとふと縫

殿い听あくも我身へ獨せん術あり其頭のるあへ拠念せで徐ま准備ゑ虧ぞ然しも
謀がぞ言ふさる大家その意ま従ふの心りとるく必へども這年来仕れる因ゑ必へぐ
ご期ま先ゑそ逃も沼亡せぞ困じる明の朝より部して外ま出るめい割篭を携へ送ふい
各々身の覚期東西失いと秋ふ包む秘事姫へ松葉密々ふ採入れて受破とりふ折
焼立ゑと先いゑえどへそぐる自焼の准備做果てふ倶ふ容ゑろ心地しゑ一日くと過ト
たる不楽しふ限ゑるろけ。小程ま楠式部少輔正直へ居ヨヲの士卒共侶ま姑麻る姫主
僕ゑ伴ゑて京師ゑ出てひるるの一日二日ゑ過る里ふ飾る錦の花散ゑて丹楓へ未し新樹
做る高峯過ぬく杜鵑聲喚かい河内路。
院近くる隨ま駒の足掻ゑ早めけ。怪ゑ一間ふ彼岸ゑへ這日も途ま立出てゑちとふれ
ふはたぐと覚れい認熟れ居ヨの士卒ゑ是姑麻る姫ゑ正直ま送られてかゑ来ゑるとい
必ひるかけ胸ゑち駿て他へ正可ふ京師ゑ。我方ざるま高らく。緝捕の大将士卒ま
必へい頻ゑふ駭怕れて飛ゑ伏くま八九の宿所へ走還ゑろ息吻あ志御注進ゑゑと叫ぶま
駭く奴婢農僕们綜ゑそれと立謀ぐ。縫殿へ奥へゑ喚禁めて出て容子ゑ窺ふけ。
登時彼岸ゑ額ゑ流ゑく汗を推抗拭ゑて膝突立る聲慌しくさへ都路ゑ推寄
来ある緝捕の大将騎馬苛めく四下ゑ拂ふ那隊の士卒ゑ三百名その猛ゑと峯ゑ降
志虎の羊ゑ趕ふどくその速ゑと野ふ揚る雁鳥の雀ゑ抓ふ似て當るゑもひゑぞ今いゑや
相距ると五六町へ過べゑ豫用意へけふ為其頭へ餘人ふ任用ゑて快々背へゑり
落ゑ卒ゑ伴ゑ仕ゑんやゑ出へ快々と聲叫涸ゑ氣ゑ岡殿ゑ立まくゑへいそぞも。
縫殿へ謀ぐぞ。衆人ゑ那這とゑへそ守ゑるゑ這期ま迫ゑそ。縛ゑ誠ぞ暇へゑぞ。
我身へ東面ゑる。矮樓ま登ゑて遠見ゑせん緝捕の士卒近づゑ上ゑゑ聲ゑ被へゑそ。
折ふ快火ゑ放ゑそ。煙ふ紛れて後門ゑゑ走ゑるゑ難ゑまゑ。ゑゑ納戸ふ退
ゑそ。身装ゑ短刀ゑ引提て矮樓へゑ登ゑゑ齊一直上ゑる奴婢農僕へ彼岸ゑゑ招ゑよ

正直
八九

有像第三十七
矢藤太自燒節婦可憐
(いせんとたきさらうおあれむべ)
(ものがたり)
うさうを鬼もそまぬおろよりもえるものはくやをまるなるらむ

せて和主正可まんそ来る。緝捕の大勢近着くらんと。樓樓の暗號を吹漏さば期の後れて捕れん快々出て復るべきと。とゝに彼岸こゝろゐて門まで出てゝ仮ゝ引入て声戦き。衆位立て近つくと。緝捕使の先隊のあるを。偽て逃走と頻るに慌て火速の催促大家俱に怖難て原来免れ処と矯樓の暗號と。ものまでもあり。左せよ右せん。後るゝと左右に立る諸慌るゝく准備の焼草へ火を投もあり。先こゝに逃て往方を。あゝ雲と紛ふ煙に天引てゝ起る猛火の勢ひ風に靡て煽々たり。怪る折から正直に八九の宿所へ近つく隨に心ともゝ件の煙をうち仰ぎ瞻つ驚て兵毎他と。まぐ知ぬ。那荘院に失火あり走り取ぶて快うも滅ね我に續けと鐙を拍て草驚地ゆゑ走る。馬に引添て先隊の雑兵非常の與る推乃へる。鋏又捍棒を挾ゝ逸足蜚く。猛く勇る勢ひの千軍萬馬の中とも。摧て入る為体と縫殿の逆に仇とて。現野に緝捕の兵猶豫せば這里に綢入ん是まぐと。短刀を引抜て合る直に念佛高く十遍許唱へも果ぬ刃火と咽喉へ異熱と。犬串て脳に穿る猛火の中へ身を跳て飛入けり。嗚呼惜むべ義烈の勇婦一旦縛の錯誤に死て功なく禍鬼に。

恨をとゝもゝきの琴の良人も御京京師に迷ひ同じ死天の旅地方替れば品降る。鄙にも猛き剣刀。身を捨て妻に東の間に栄枯得失幸不幸憂苦歡樂主夜の這世那土へ別路に遇ば歎を知るよりも。姑麻る姫を八九の宿所に失火あらと。ゝ。ゝ。ゝ。ゝち敬馬に復市と。作を先へ走ゝて。路の傍に轎子と。歌ゝる隨に時移るまぐ。火の鎮るを等ふけり。怪ゝ程に正直に馬に拍の八九荘院の門前に騎着て。只管下知に。雑兵を緑入々々火を滅されば近に里に荘客们も皆那這に走て。水と汲かけ。柱を倒して。諸骨折て挿に幸して山風の烈ゝ。東西に焼失れてその它に過半残りけり。既にして縛鎮る程に正直を復市と両個の雑兵を遣て。姑麻る姫并にその身に宅着に呂聚合て怪々と縛のよりに報知

走る姑麻姫は縫殿が往方を問ども誰も知るものなく東西に走る焼迹の煙ぶる女の屍骸あるのみ短刀を拔持るが爲も放まじと生るものはなきまければ驚き疑ふ姑麻姫も復市は母のうへ心かかれば小雲時もあらじと走りて其首を刎ねて件の屍骸をとりつ

とども焼れて真黒はなりれども疑ふ釋ざるけの正直これをうち所で縫殿とあらんは左まれ右まれ一家皆なる奴婢と母の今まで一人もかろ来ざるいかろ殺るるかー快哉ぞ

と言ふ一立る下知を遵ふ雑兵と俱ふ復市を作仁もまろ歩く那這と部をつ渉猟る程ふ五六町西のうへ殺る山路を仰反仆まつめのあるを他いまくこれをうそ。そは彼岸二ふあらぎと喚ぶうつくれて彼岸二は頭を拾げるとそを他欽和主は京師より何の程ゆ還りたる。咱家は緝捕を脱れんとて家を火を放げ後門より人は後れぎ逃れども命運ふく這頭ぎ。他那石ふ跌ぎて轉輾び折腰骨を下隆を撲差けん立ふ起れぎ疼ぎ楚を堪ひ鈍ぎ今まで臥てるぞよ起ーあひとふ間を復市と雑兵四五名来まけれども他は躯て

復市仁は彼岸二を指ーふ示して他は我方ざるの奴隷ぞ。彼岸二を喚ぶ做きりの箇様の箇様のゆわるる憶ぎ石ふ跌ぎて這頭ふ在りとふを詞せるーく報知られば大家倶ふ訝りそを所以あるん他他人何ぞの與ふ京師より緝捕使の向ふとあるんや況や家を火を放で逃亡たるん罪軽るーぎ捕を追ーた。牽のそ由で楠殿正直ぞふ亶ふ上ん快々立ぞと暴ふ

ふて合ふ足を吊抗て八九の宿所へ拘て来る則縛の趣を正直ぞ報ーふ正直躯て端近く出てそのるを鞫ふ姑麻姫も驚ぎ障子の陰ふ身を靠ぎ縁由を聴くぎ

登時彼岸二は膝折布て縛徒々と招るぎその趣は京師ぞ。雑色曾領の士卒の爲ふ痍を肩ふて既ふ必死とえー折自已は毎く逃走るぞ。辛く河内へかる来る姑麻姫并ふ維盈の斃れーんと歩ーを維盈の妻縫殿ふ報ーふ折るる京師の風聲の這頭へ

ぎ。雪えて彼岸二ぞ報るーと這那喩合るーふ縫殿は遂ふ疑ぎ然は這里ふ京師より。必緝捕使を向られんその期ふ及ぞ汝達は家を火を放で逃亡よとぞ先焼草を准備せ

られ。却人別に盤費を賜ふ小可さび都路へ又遊佐殿の城のくさも人を遣しとせられ。
二三百の兵勢の這方へ推寄来るひとを。小可逆まえてければ是必京師より向せるく緝捕使
るらんと思ひければ走のかなとようを縫殿刀祢に報ける。然いば我身い矮樓に登りて見定めを
聲を被んその折に火をのせよと。短刀引提て遽しくうち登りのち程に御勢は近く近
つるが件の暗號と思ふも及ばぎ大家慌て那這に火を放ちて共侶は走りて背門
より逃し折小可い山路なる石に怪し蜚び骨と損ぜて仆れて今まで此処と有つる隨の陳裏
迄顛末分明なりけれども。縫殿い既に枉死して片言なれば正直の疑ひなり解ずりと側聞
せし復市と躱れてうちなく姑麻に姫の歎を弥倍を憂患悲泣原来那もまた刃を持る亡骸い
縫殿なんに我母なりと思ふのを言はせさんいさぶを。詮議の果るを程は正直呵々とうち笑
ひて。なくなぶ死い縫殿とやうが。疑心暗鬼に迷される。疎忽の自滅是非も及ばぎ。是女流の
なられば深く外なるに足らねども。一家児なる奴婢毎い各々盤費と受ぶ。暗號とぎ

火を放ち逃て縫殿を焼殺しなる。その罪孰か免るぎ。就中彼岸に疎忽なる姑麻に姫を初
なる。紐轎子に無せられて。街衢を牽れ。又維盈とる。伴當の殺れしとなるも我い
一切なり知らぎ我なり知らぎ。知らぎ這奴ぶ知ん。該いなり。そを云云と縫殿を告て鬧せしより那
這人もその虚を徒て喋々き。緝捕使に。とりて
正直が送りて返し来ぶける。何里へ緝捕使を向らるぎ意なる這養蚕物い狐狸を魅され
なる。唱徇らしに家を焼し。縫殿を殺せし。その罪を。輕しぎ。遊佐氏に
告知て。逐電なる奴婢們を索ぎて後に。那首の沙汰は及ばぎ。仍と細めて措べ
と。雑兵們に預けるに。なるに至て彼岸に初て夢の覚るぎ。眼を瞬き舌を吐て。ひつと
なるに解くようなれば。黄蝶を舐り。唖児を。獨苦しぎ身の科に今ゆせん方歌頭に
思念せん間も是暴なるに奉立られて退出し。徒り程は復市に膝を枕めて恭しく正
直に禀なり。方才彼岸に招るに。那焼死なる一婦人に縫殿なるとも疑なる。件の縫

殿の在下が母親でいへば安菲の弟を許さぬと願へと正直ち听て縫殿も陳忍の罪あれども
身故ゆえ。ひとへ沙汰を及ぶ。安菲のゆへ姑麻ヶ姫を生て左も右もせよ。我が遊佐就盛の城へ赴き
対面して。今番の合戦の命令管領の下知状を遞與せば。那里の時宜よろし。拙者が明日欲
後日の比呂合まんと。栄之姑麻ヶ姫が奴婢毎の一人も存ぜざりしが萬吉が不便なれば汝達
いとく。閑なく仕へよかと宣捻ていそく奥へ退くの。件の栄と姑麻ヶ姫と宅眷を示しそろ
さて遊佐の城へ赴けば。是ゆより雑兵が辞して京師へ還るもヨヌろ。その它が彼岸二城
筑ヶ巣して皆正直ゆ後ひければ九の宿所ヶ留るのゆ正直の妻女児ヶ俱して来ぬる男女の
伴當と復市ヶ作のこまりければ復市が稍便りを沿て姑麻ヶ姫が母縫殿の枉死の趣安菲の
事怠々と報知して香華院と問ひるゑ主従俱ヶ涙吐て心の憂ひ限らるけれど側ヶ人の
ヨヌろれば迭ヶ意衷を盡ヶ由ゆ。姑麻ヶ姫が縫殿の亡骸を宝珠院へ葬るべしと住持花
智圓ゆ贈る消息をも遞與されり。是ゆより復市ゆ他をれて市ヶ赴き柩を求めるどもこの

程ゆ長ひ日ゆ〳〵暮果てゆ夜の深ゆ次の日里人を夾ひ柩と舁者。宝珠院ゆ送りゆく。
その路ゆ〳〵思ゆ我身の天命かゆの如ゆ狂ゆ別れる親と寄て来ゆ相見しる
只一日ゆ二親ゆ〳〵皆縁ゆの差ゆ故ヶ陽炎の命果敢ゆ。その禍息の所為ゆ
ほんとゆ今ゆ〳〵何ゆ〳〵ん奶々の自殺ゆ婦人ヶ平ゆ。大舎男義烈ゆ倒ゆ。その身の仇ゆな
なるゆん倘尋常の女子ゆ。其ゆ徒ゆ〳〵ゆ左ゆ就ても右ゆ就ても世間ヶ幸ゆの我身
然ゆ。ゆ〳〵ゆ日ゆ八九の宿所ゆ留ゆ罪ヶ。姑麻ヶ姫ゆ〳〵ん。ゆの奴婢ゆ共ゆ逃走
とも投ゆ。地方ゆ。ゆ〳〵ゆ迷ゆ〳〵ん。ゆ我父の自殺のゆ。姫ヶ。ゆ〳〵ゆ祈ゆ
まで空ゆ過ヶ本意ゆ。ゆ〳〵ゆ難ゆ〳〵ん。ゆ歎ゆ涙ゆ露の玉ゆ綴ゆ女意
ゆ〳〵ゆ如意ゆ宝珠院ゆ。ゆ〳〵ゆ。這里ゆ山寺ゆ。ゆ〳〵ゆ姑麻ヶ姫ゆ。ゆ具ゆ。ゆ〳〵ゆ八
九の宿所ゆ焼ゆ。姑麻ヶ姫ゆ京師ゆ。叔父正直ゆ送ゆ。ゆ昨ゆ着ゆ。ゆ今朝ゆ
ゆ〳〵ゆ知ゆ。智圓禅尼ゆ姑麻ヶ姫ゆ消息ゆ。ゆ。ゆ意ゆ。ゆ。ゆ復市ゆ客殿ゆ

入れて對面あり登時復市に智圓禪尼から對して僕が隅屋小一郎維盈が獨子を復
市安次と喚做めを以て及せのより狹仙に時故あり他郷に赴くを成長りの比に儒
に學日這地に來るまでの折母の憑に儒して京師に赴く父維盈に對面の望を遂な
ども幾日もあらで維盈猛可に身故りの比哀傷の涙を袖に裏まで姑麻を姫上に俱
なる再這地にかの來る日母に猛火の為に焼れて亦復怙を失ふる不幸と查ぬか
即便母の亡骸に御寺の土まるまで欲もの我情願のまるまで主君の指揮まるを是
ものうに消息を載られてやいん宜く憑まるとの智圓尼數珠繰止めを胸
苦しるに偶屋主との縫殿刀祢まで打も續いて六月に喪ひの姫上にさだる
便るなかもの況和殿の愁傷をへ一つる會者常離泡沫夢幻の世なり安堵
るいもの打ると讀經の准備に程あん柩を本堂に登して姑且休息まの私
と叮寧に慰めるを信る折に一個の女子の甚笠の方より出て來る復市に茶を薦る我

とそれは是別人なるぞ郷高に復市が相伴に來て八九の宿所に留め置る垣衣をあるれば復
市に呆るまで胆を浅に左見右見て怪しの人の往方るあり別に昨燬を避んと宿所の
奴婢們共侶に去向も知ぬるるけるよと思ひて一
紀對面之所以てあるに其麻公そと問ふを智圓尼推禁めを訝りあるに這女中に毎日あん
刃の母大人が消息しなかつるのそれの折使の口状も是に他郷の客で伝れど縫刺をとくを行
伴人のかるまで權且御寺に留め置て甲まれて使せのと他事に憑れられぬ
仮這里に留めるを昨失火の折に煙の足そ這垣衣が最掃縫殿刀祢の
うへのを左ちん右あんと起て居て苦せられかど男に医に女僧院に誰を這
んに付られば共侶に氣を向るの信れば這個垣衣に自焼の中に干ぬと訝るとの
へば赤垣衣も涙吐む瞼を拭て郷高に身の娘々君の苟且るあ情奴家を御寺へ
憑さるの折に貶る一衣箱の衣もあ身が京より還るの折を須け玉

ひ。亟匝も這里不ばるか。情由は巨細ふ知ひども今い紀れるふ。ゑん別て上京しけれとらいよ
と泣沈め。復市も堰留難る。眼水を梵と閉縫りて。肚裏ふ歩ち。原來奴々は自焼の覚
期ふ。あく少女と這女僧院へ頼ふて。堅要なる匝と預けぬ。その為ふ垣衣も火ふ
焼れ。迷ひ出で。往方も知らるる。我身ふ合て大々ふ反義理ある女子ふ。ようを親ふ
いまぐ告ざるふ任まで敷く計られる我親ふ逆ふ志て微妙け我は不及々々と徳義を
感ぜ今ふ逆憾さ弥増せども人ふ告ぐ上ふ。ねんねび貌と更め恭く。智圓尼ふ向ち對
ひて。僕は昨姫上ふ倶ふて這地ふ還ふ。我母が這妙を。御寺へ預けまゐらせる。上も知らず
恥ふ過言を允さるるか。就て宿所の奴婢毎ふ昨送ふ逐電ふられ姫上の臂近く使ふ
いらぬ自由の至ふ。垣衣と返ふ。宿所へ倶ふ。欲ふ這義を願ひまる。他事
ふ。と智圓尼ふ。聞ふ屡々點頭て。そもそも易ふ。宿所は半分焼て。その它は悉ふ
と。抜ぬけ。其頭の修復果るまで。姫上は又我寺ふ在まもけ。ふ先住の建られる。離

根亭も伽ふ。と。間ふ本堂。衆徒と聚る鐘の声。鎬々と。哀ふ。智圓禪尼は遽く
辞て方丈へ退ぬ。あく法衣と更めて本堂ふ出て来れば。徒弟の比丘尼六七口。木魚を
鳴ふ。羅列て。経を誦て。半晌許。復市は初ふ。獨施主席ふ在。葬式。焼香果て
母親縫殿の亡骸は正元夫婦の墓の側ふ。推降て葬りけり。既て復市は住持并ふ比丘
尼達ふ別を告徳を稱て。垣衣を促せば。垣衣は逸早く。身装して。ふ。往日縫殿が預け
たる。匝を智圓尼ふ請めて。出く。復市ふ遽與りけり。登時復市は垣衣が衣箱。その它は東
の西ふも。央奴們ふ。駝て。垣衣ふ。ねて。かう去程ふ。真実ふ。比丘尼。幾名。欲出て。垣衣を。労ふ
齊一立て。目送りけり。是より程歴て。復市は身の暇ある折ふ。姑摩姫ふ。意表を。出て。正元の
葬所を。たず。悄々地ふ。京へ赴て。正元并ふ父維盛の。骨を。一壷ふ。斂め。土中ふ。両刀を。そ
還て。倶ふ。宝珠院へ。改葬。けり。父母忠孝れば。子ゆも。亦。かの。如く。忠孝。ある。天。鳥。鳳の。卵。ふ。その
雛。必ず。鳥。鳳へ。王樹の。花。さ。その。実も。王。蓋。ふ。出て。藤。ふ。も。青。かるの。ふ。復市。欲。ふ。是。後。ふ。記

第二十八回　山上の千里鏡克く荘院を覗ふ　佛前の本命録初て病妹を知る

却説石倉復市は垣衣を将てその黄昏に八九荘院にかへり来て。うち見れば内外に人いと多かり。訝しく思ひつゝ。躬て手作を喚近着て。這頭のあるよしを問ふに。作答て然べとよ。正直なるは遊佐殿の城内に宿所あり。権且其首に住のべとて。奥方并に息女さへ召合されしは今日正午の時候でありしが。伴れば我姫上の萬事に便なかるべしとて。老なる伴当両三名を留めて。這里へ隷らまさりとふに。復市點頭て。又垣衣を伴ひて。それより奥へ杖を入る果して姑摩姫の身邊にあり。絶て人氣のなかりしかば。且垣衣を次の間に留めて。獨姑摩姫の身邊に赴きて。額をつきて恐れながら云ふ上は。僕不慮に故郷に還りて。京より伴住しは則親の遺訓によれり。是切よめとながら早晨に京師を出しより。今朝まで御側に入ざりければ。親の人我らにさへ係らくと告げまつる折ありしかばこそ。許しく思食けん。昨日仰を承る如く。母縫殿が亡骸を宝珠院へ葬まつる。

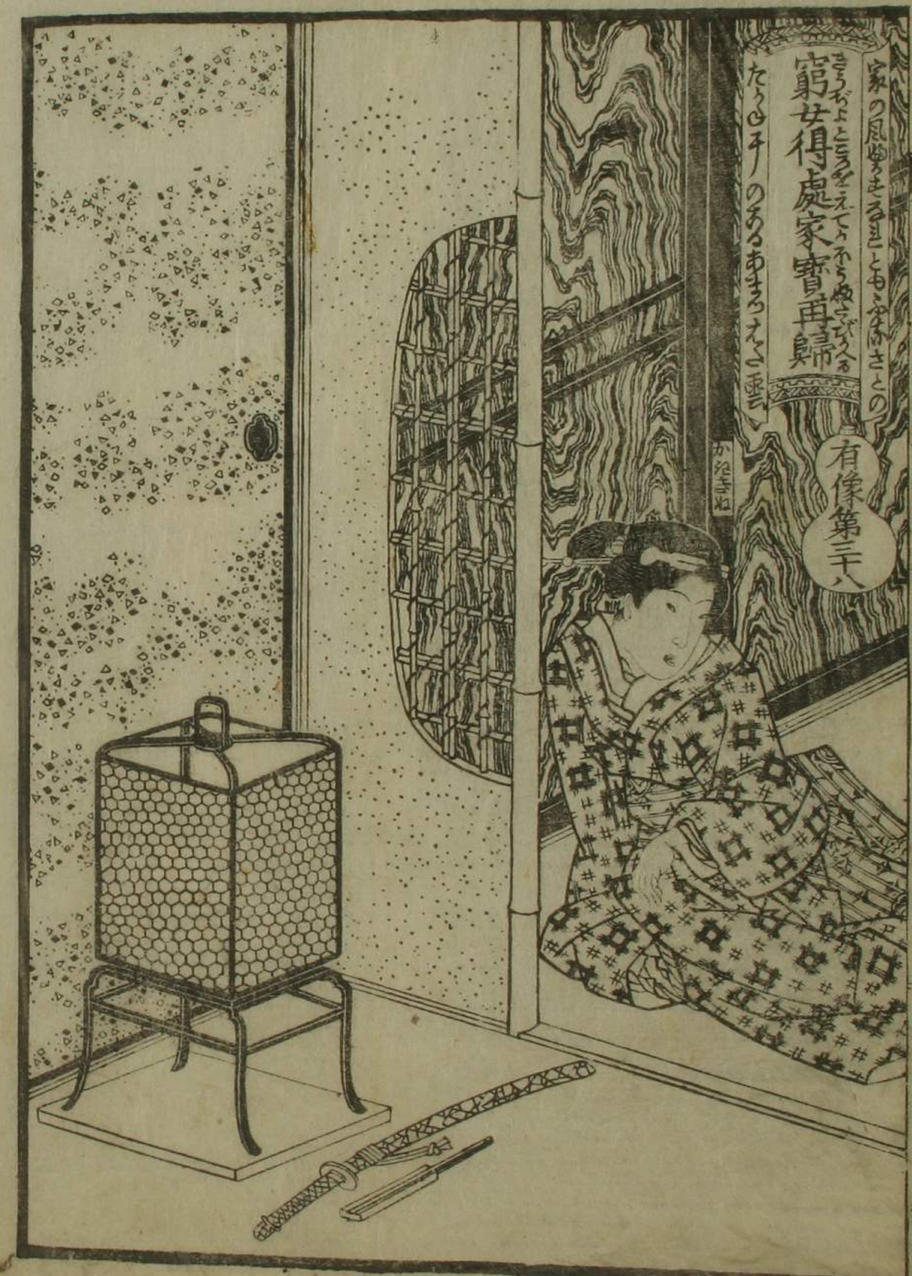
目今女子に来ければ。正直主の老小の皆遊佐殿の城内へ迎合されしかを初て。義知仕の這折をもて。乃者の意衷を盡しまゐらせんと思ふによりて。大胆なる身に二親の忌服あれども。異並悉外の折ありば。喪中も憚らで麻衣の浅ましき世を争何いせん。許させ給へやと。あげて方で疑ひを解くなく。狭くなうも姑摩姫うち聽て。その我望む所は叔父君の伴當の遺されたる二人欲さへあるに。ありけど這里は遠くて京師にて維盈が在らせたまひしを。いかにと思ふ心なりとなく。思ひの那彼岸に招了て。世よりも人と言ひけんよりも。竊聞しより惜めども。歎けども悔めども返しよりも。縫殿が上の信差へ人言の仇と做りて。雄々しくも慚りて自殺せられし。我彼の故によりて。霜夜の炭と憑む慈臣節婦を喪ひしも不幸は。你の為なるぞ。我身の為にも一大不幸面目もなきに。縫殿が嘆ずることし。隊知る你がかくて来べしと思ひ。かくて来て親の忠義を承も嗣ぐ。その誠心を猜しく由を詳に知りぬ。靴を隔て癢を掻く心地のせしで。本意なけれども快く告よ。甚麻呂と問れて。復市愀然たる貌を改め。聲を密めて。父維盈が京師にて管領畠山満家の士卒に

家の風ゆゑとこそ
ともかまさとの

窮女得處家寶再歸

たゝ母子のあるあまつたさ雲

有像第三十八



為に深痍を負て竟に自殺に及びける首とへば縷々之尾ハ又箇様々々とその折の遺言
報知まいらせし平胸許又小可が回らく故郷へかへり来にけるハ。縷る情由をりとて。養家を絶れ
綷の趣後の養母の携子なる二郎に家を嗣せん。身に折りて出役の途より必死の大泥ありて。
辛く免れて浪華に来まけり。這時影と躱さし。退身の折あるべくば身に一個の行伴あり。
他ハ女子なれバ捨るに忍びず相倶して遂に故郷へかへり来り。絶て久しき母親に再會の本意を
遂られども父惟盈ハ姫上の高野詣に倶しまいらせて。未だ還らずと傳きこへその折母の推量に姫
上皇城を赤肉さんとぞ。京へ赴きのしまさんハ。ゆる夜すがら夢さへ安からず心にかゝりしあれバ。急ぎ京師へ
赴きて。訪ひなまれとらるれしが。行伴なる女子なれバ。伏見の宿所に留めて。他を案内に隷られ
たれバ。曉に出夜の宿る路次と云ハ管も急ぎて。急ぎ京師に到りしに。姫上獄舎に繋れあらし。風
聲を詳に傳えしかバ。驚きつ那這と獨徘徊せし程に。父維盈が満家の士卒なる條持媒鳥に
捕稠られつ遠箭に射られて既に深痍を負ひし折料ぞ其首に赴きて。豫修煉たる礫を飛して。

仇を矢庭に斃を退け。既に仆れし維盈を肩に引掛け走去りその日の圖の頭なる觀音堂に憩ひて親
なるよしも子なるよしも迭に名告り名告られて會を別れの目暮春追ひ外の降ぬ驟雨を袖に湛へし行
潦なれバ父も覚悟の父ハ思ひ旋まし後の事只ハ姫上の御先途を看なれど叮嚀に託遺しける
忠誠勇猛禁るも聽かぞ大奮激して。みづから刎ね死。父が枉死ハ満家主の綱轎子と秘計を
めぞ姫上の支黨あるバ搦捕んと欲りせしを知るよしもなく乗せられて。綷も皆畫餅となりし後悔の
外ならぞ那彼岸二が招了に綱轎子なるのみにして。正直主ハ知ざる狭鵑鬼とよばれたり。這一條を
満家主の秘策なれバ後々まで情由を知るもの罕なるべし。偖て當晩小可ハ父維盈の亡骸を
觀音堂の頭に瘞て又洛中に赴きつゝ姫上繋れあらん日に拯ひまゐらせんと竟みしハ一人全く仇を投
めて冥土の死伴ませんと思ひ決めて。那這の風聲を探りつゝ不慮に故に遇ひて綷の趣を申明
牌に寫されて伴當あらバ正直主の第へ参るべしと徇示さるゝ事分明なれ。疑ふべくもあらねバ欲ひ
忽地意表に出て親に代りつゝ他を狙て正直主に見参まゐらせ。姫上歸御の死伴に立ちとぞ弱てふ家。

群玉堂印發

小る不御爲不僕ゞ。這里不留め置くろ一。女子の往方知れざりければ自焼の折り婢妾们と倶ゆく迷ひ出うけんと推量をぶひ不他いなる日より。宝珠院ふ在りけ料ども對面と。縁由と聞れ不。いぬる日不我母ゞ恁々とのひ誘ひ那里遣ーうりけるその折小可ゞかう来るまでとそ。最重安ろ不一箇の多匣と。件の女子ふ預け遣ー。這它衣裳調度ゑどまく含ませうとふ事の情を猜ゆる不母縫殿ハ只管不彼岸二ゞ似而非注進と世の風聲不惑されて。姫上も維盈も京邸ふ輙ふ。

縫殿ハ只管不彼岸二ゞ似而非注進と世の風聲不惑されて。姫上も維盈も京邸ふ輙ふ。

ふ不ふ。縛捕使向ゞ自焼と死んぬと既不覚期をゆる折小可ゞ行伴る女子といそ助けんそ。

縛云云と誘ひて那女僧院ふ遣ーうる不疑ひう。件の女子ハ名と垣衣と喝做るのホと。

故郷ハ伊勢ゆる某の里と由緒ある武士の女児ゆれども過世ゆくて小可と駒阪を倶ふ一。這地ふ

伶仃ひ来ふれば。有般ふ揮も乗るから折ゆる宿所の婢妾毎の一人も在ぎるりゞ。智圓

禪尼ふ請亭ーとそゞ俱ーと交ゆる来れり。先那多匣と御覧ふ入れんとひゆ後方ゑろうて宝珠

院ゆりて来ゆる多匣と含ゆて恭ーく。姑麻ゆ姫ゆぎまゆるゆける。余程ふ姑麻ゆ姫ハ。聞く

後悔の額を病ー嗟嘆。七維盈とのひ縫殿とのひ或ハ敵の為ふ謀られ或ハ躬方ふ衍られて

命果敢ゆくなる亡せーハ皆是我身の越度ゆ。師の誡ゆ守らゆりける出ふと知れば罪ゆるる。

ゆるゆ倍ゆる夫婦の心烈ゆその甲斐ゆ見ふ似られども仙ゆより遠離ゆる。その獨子ゆる復市ゆ料

ゆ故郷ハかゆ来て親の忠義を接ぐとハ是花謝ーと実と結ぶ三世の天縁最憑ー。然ハゆ縫

殿ゆ送ーたる多匣ハ必要あるゆ。何ゆるゆん。とよかりとのふ復市ゆろる。ゆをゆる匣と引ゆそ重

封皮せー韓組紉ゆ解返ーと。又返ーと開けゆ内ふ正元夫婦の木主并ふ菊水の旗這它ゆ金

銀多くゆる只一枚ゆる目録の左編ふ金のヨヲ寡と寫ーゆ。ゆ木主ハ祠堂納ゆ。ゆ旗ハ什物と

ゆ。秘措ゆ。ゆるゆと短く送ゆ筆の迹勢ひ宛決然ゆる。男優ゆ女文字ゆ。ゆ子ゆ為ゆ一行

たる。ゆ級今般の忠心義胆と深く感ゆる主従ハ憶ゆ面と昭光ーつ。感涙の多ゆりけゆ。且ゆ姑

麻ゆ姫ゆ木主と旗と含ゆ抗ゆ額ふ翳ーゆ念ーとゆ匣ふ藏め瞼と拭ひて。南復市ゆ輙ゆれふけり

と思れゆる我身ゆ恙ゆ。縫殿ゆ今般ふ選佛場ハ秘さんとせー家の重寶のゆ。我

て多く漂流し、凶中の吉禍中の福、火も焼れず人も渡さず、倚伏の糾ふ縄に似て定め難き世の起住、神ならぬ身と知るべしやとのふ。復市慰難て姑且倶に惆然として登時姑麻姫に果去るべき甲夜過ぬらんと思へば四下を見まわすに、復市你が倶して歩まえ、垣衣と欲ふ女子も甚麻姫はまさるべきと思へば、とのられて復市心うそ宣ふその言もいと絶這那と禀もとのヨメうけれども紛まで見参遅滞を及びて先より他をば呪次の間ふ伺ふ〜これが為不乖けんでくとの八ふ〜遅〜身を起し、そよと垣衣女這方へと喚立て會釋をされば垣衣は阿と応て找入り見参に當て姑麻姫は燈の下より垣衣を熟視るに、八ぬるの女子も容姿の艶麗る舉動も鄙るべき現復市が〜ふ美左を申諸ある武士の女児ふ〜と思へば近く招ひ寄そ。ある初て遇ひ侍る憂あ漏れぬ我身を摘て艱難さもと想像る。和女郎も故郷の伊勢る〜も復市ふ由縁ある人と〜ひけが初見参より豆取憑心し紀心地ぞ考る。奴婢ふ医し折れがさぞ使さとヨメ〜めの言もとろ沿玉ひてよと最懇ある言の葉を掩頭の花と垣衣は感涙坐ふ額つ紀て世ふ有ん紀御懇命。

面る紀とるべ〜。ひ〜る日生の出ふ思ふ身は神風の伊勢路より流れるべの河内ふ。相識もあ〜ぞ侍ふ。そを憐まぬあ〜ふ薪水の事でも厭ねど鄙の田舎ふ生育て心つ紀とのまるべ〜ふ。ふ〜ふ〜ふ。ふ〜ふ〜ふ。姑麻姫も更も不古物々ふ主ふ侍ふ〜ぞ這里も田舎の僑居は富裕ふて礼節を知るとふ宿る反ふ隔あて思紀ふ屈ぞ復市は五世の譜第我身の與ふ俗ふ。乳兄弟を侍ふ〜ふ萬吉と憑むのふ〜れども有繋ふ男女の差別ふ身遥親く使んとの你ふ優もとあるべ〜やとと憑ふ〜示さる。垣衣は首ふ仕へ〜ふ姑麻姫も欲び夜は臥房ふ倶ふ〜ぞ聊も介意せぞ獨心ふ思ふ〜垣衣は長て旦忍ざるも虚華る〜ぞ他は必復市ふ結髪の妻ふて倶ふ故郷を走り〜ふ〜ふ〜ふ復市ふ二親の忌服ふ他ふは謹慎むべ時るふその情縁のエとも質問ふ〜ば恥ぞ〜んや一稔ふて復市ふ親の服の関ふ折我身必媒妁と夫婦ふ〜ぞ〜ふ尋思せ〜程ふ忽地ふ悟る〜ふ是裏ふ我師の別れふ在ふ示さ世ふ〜ふ〜ふ四の句ふ垣衣黏石雁盈復安と。

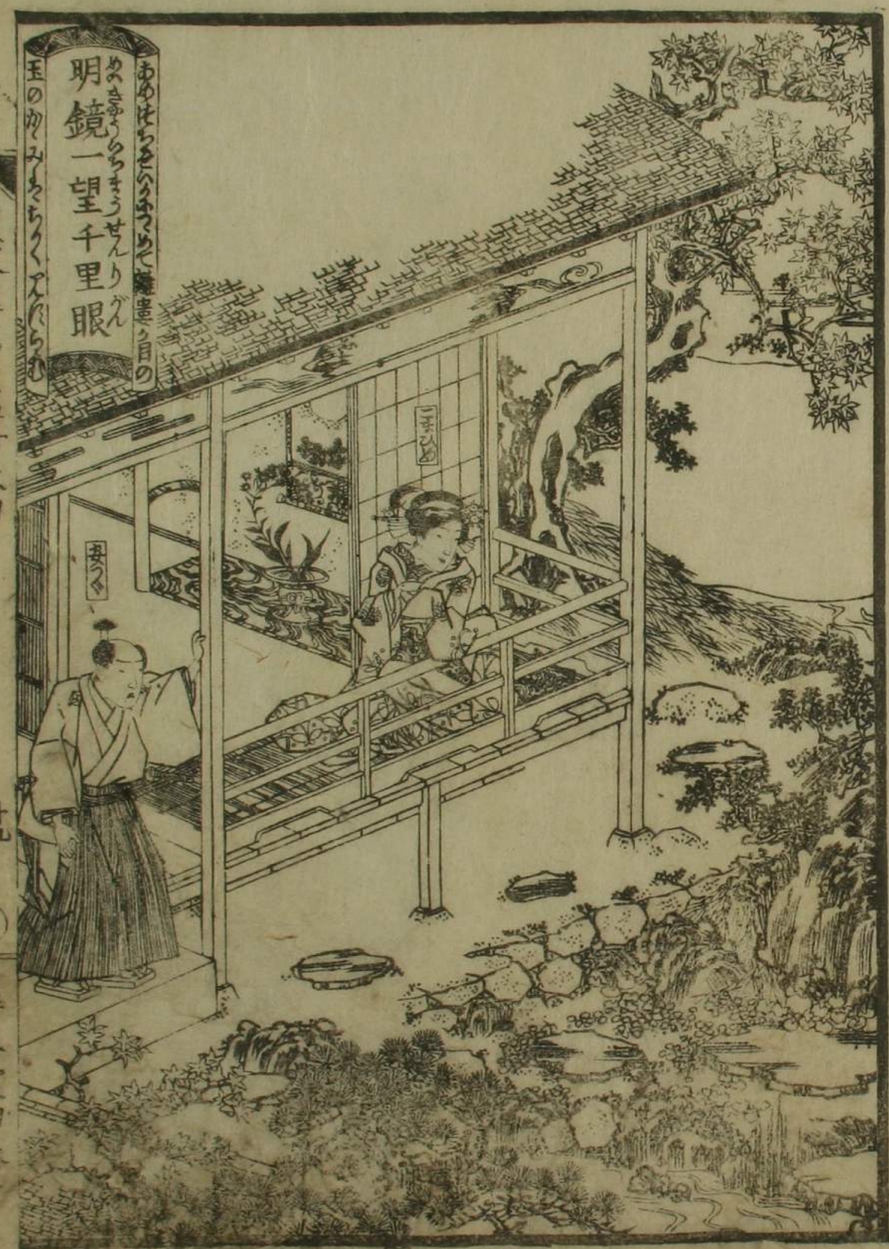
則今の身は垣衣は是必ず他の石倉復市を伴れて来われば石は桑とやるべし折られ
維盈夫婦は禍鬼は身を殺せとのべども其の子復市安次が不思議は伊勢より帰来く
我身復安らかよりと四言三句は盡されて盈を虧とし維盈夫婦の虧るを復安が歸
村ふの子とるとりも是偶然のあるべし又前二句の遇一必破とある二は一休らいと既は是分
明に只會六有歡と示されるのみ今も尚必合まるようなれども我仙嬢の神機妙算後は必
悟るとあん然いざ我は京師へ敵一人も斃さぬぞと身は縲絏の辱を受て股肱の隅屋夫
婦を喪ひ遺教の科に縦奇術は破れぞとも又剣侠の技を要せぞ今より女侠は為るべし
と獨心は折言ぞ深念の脚を固めり恁而有一日姑麻姫は復市は事吩咐る語次は伝の既は類
家を去て実父の迹を嗣るは西石倉と名無る要り隅屋復二郎安次とは姓名は郷京師へ
在り折三晉領は知れは伊勢へ憚るとも他の姓を冒さんより隅屋と名告
ば相応かるべの義は心屬ぞ欲とのれて復市何とぞは羞て小雲妾時は応ぞ為せぞ

くふて答るは仰寔はその理あり小可も亦件の義を思ひはるは小ども爭何せ石倉氏は
稟る養育の恩一朝のふあ尼縦類父母の欲るまゝ義弟は家叔を譲り與は伊
勢へ還ぞ為ども辞別は及び切て養家は氏を冒て徳を忘れ志を表さんとは尚
去ども宜は去れば是も亦耳を塞ぎて鈴を盗むとは常言も似るべ仰はとて僕は今より本
姓は立復るべ後は至て幸ひは児子二人は生るべ一人は必石倉氏を冒らて本来は志を全うせん
あの義を許さぬのとか姑麻は姫感嘆て現安次が光実る一椀の糧一夜の宿も報は
義士の志況年来類育せられ報恩然いざと感嘆て却荘院は修復は并は奴婢農
僕は新は養ふべ也は村長は商量せば他多は通て我父祖の徳は忘れ殺の義は封助は
るとあるべとは又這一義は談せる費用は量義は室町の堂中は小倉院より賜ぬは渡され
千金あり然でも縫殿は貯る財用は医師から小雲妾時も猶豫きとは復市は為
次の日村長は故老は件のとは告知て綜は便宜は徴は約莫當國の農戸商賈は

皆正成の遺德を慕ふて、あるいは、ものどもあるふ今番姑麻ゐ姫が京師ゑ復讐の為体、その綽
名を發覺れて宿望を遂ぐたへども、愉快ものヨヌろしと語り接吻して憑しく思ふ折ふれば件の
ようを相譚れて更ふ憚る色もなく、鄰郷まそもうち聚合て商量速ふ整ひれば男女の児孫ヨかい
ふ相応を迭ふ擇て各々八九の荘院遣ひ或ハ奴婢と做ひ農僕ふてれば姑麻ゐ姫ふ仕
るの初より三年ばかりあて郷ふ正直より隷られる老伴當二三名ふ東西を食せ労ひく
主ふ返ひ遣ひけり徒て又村人の山あるりの木を伐出ひ食ひるの夫役ゐ出ひ力を戮て荘院ゑ焼
たる処を修復せ、ば家も亦初より最奇麗ふなれども姑麻ゐ姫ハ必ひより銭財をヨヌ費
さで落成速ふければ只是祖先の恩德と村長并ふ村人々の俠氣ゑ敎ひ所とそその間日毎
日毎ふ飯ひ肉ひ酒を餽ひそ叮寧ふ労ひれば感ぢて粉骨を盡さるのあるりけり然ハ又稱
正直ハ家宅の地所を這那と只ハ管ふ擇ひ。姑麻ゐ姫の宿所より六七町東のくふ山川ある処を
占て孤山を内の細小川を前ふて家を造るふ招ゐ応考番匠ハ罕ゑ作支遲滞ふ及びりゑ。

秋ふ至りて安ふ成くふ移徙をとけるふ憶ゑ病鬼ふ出来れ。苦心ふぐうもあらけり。其頭のあ城
原ふ正直ふ一個の苟見あり。名を甘子と唱ひ姑麻ゐ姫と同庚ゑ遊莫標
致ハ二の町ゑ額廣く頗肥腯て、般若茶ふ似るべれば花の傍ふ深山樹ゑ。日と同ふまゑ邛
氏ゑ論ふべくもあらゑ。這秋痘瘡を患ける怕るゑ難痘ゑ。医師ハ匙を捐て召べとも来ゑ。
験者ハ壇を降りて效なしとふ。ふの故ふ正直夫婦ハ憂悶て寢食を安くせゑふ。ゑと
ふ譚ふ這里より程遠ふ如意宝珠院とふ女僧道場ある。本尊地藏大菩薩ハ人の病
疫ふ利益あり。特ふ婦女子の難病平愈を禱ふ応験あるとゑ。住持の尼苟ふ祈禱
憑ゑ。護符とて一ふ。ふ麁ふ。ふ
院遣ひ。ふ程ふ正直の渾家木石ハ佯當最義名狹従て轎子を飛ひ。ふ。宝珠院へ走ひ
地藏菩薩を拜ふ。住持智圓尼ふ對面て。女児の病瘡を患ひ。祈禱を憑ふ
肌膚衣と生れ歳月の小録と祈禱料の金一包とまゐ。せれば禪尼速ふ差ひて。ふ祈禱

有像第三十九

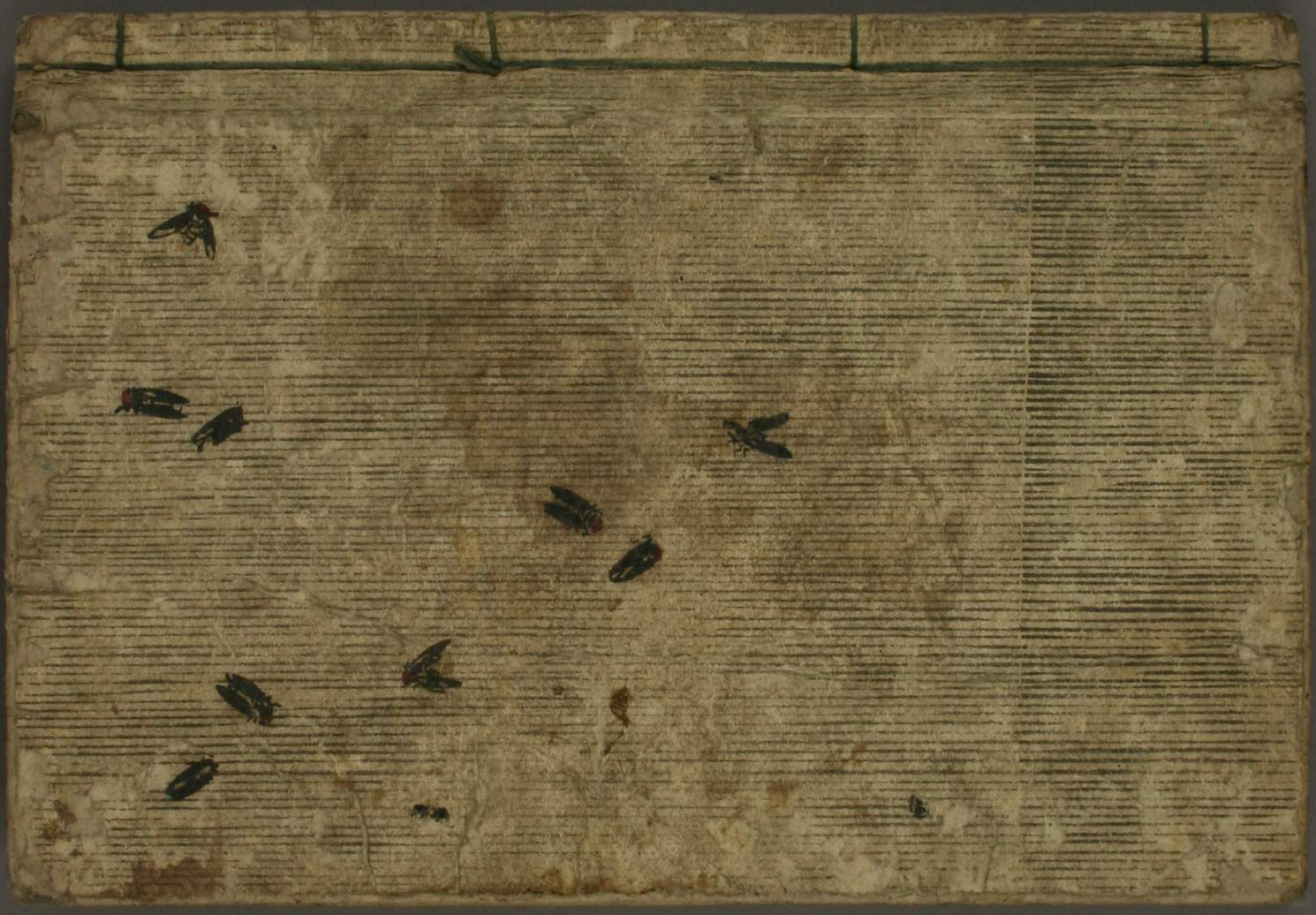

あめはちをへのふつめで難波ゑ目の
玉のゆみをちらくでらむ
明鏡一望千里眼

べしと先護符を與へけり。是より七木石八日毎々々に宝珠院へ専使を遣して護符を乞せけるに菩薩の利益恩恵を蒙らざるに日と歴ぬれば苦子の難疫稍癒ると既に結痂に及ぶまで辛く命根と係留められぬ。疫癘酷く迭のそのく醜婦に憑りけり。正直は是を聞て所以なく八九の荘院に赴いて。姑麻の姫の挙動を看るとなるごろ〳〵悄々地に人を遣して那貫の動静を覘ふに詳細知るとなるごろ〳〵に一日みづ〳〵宅地の内なる孤山に登りて那這と觀且まに姑麻の姫の宿所の光景殘りなく在るごろ〳〵と豆足穴九竟と欽び大後世千里鏡とも。日毎に那里と覘ふに。こて姑麻の姫の折々坐る庭より坐席の半分まで鮮明に見えざるなく那に奴婢とも姑麻の姫と知らず。便のヨヌクりれば正直稠に歎じて我みづ〳〵那里に也くとも姑麻の姫必小心して解るとなく〳〵に這眼鏡をのみ居るなく那里の動静を覘べ他が馬脚を露さざるまでと易ろ。嗚呼我なく〳〵動るに哉と獨頻りに自屑自賛して。那里の動静を覘ふ毎に遊佐の城消息と。昨は姑麻の姫が宿所に住るとのみ聞けば又住ると間なく時なく報るのみ然して京師なえ〳〵密謀の筋あるに和ねば就盛に冷笑して正直も亦勢に衰漸々に懈りて自親又孤山に登りて折々家頼に吟咐てそのを外に已ぬ高間の山の雲をのみ食るとも苦子に徒り程に姑麻の姫に叔父正直が稍久く訪も来ざるに女苦子の疫瘡の重かる故なりと知るより絶て音ずれども疎に還て得意を後安と思ひて折々の風聲を心ともなく他なく那彼岸に居る比正直は捕られより遊佐就盛が沙汰として彼岸に共侶に逃亡る奴婢農僕に往方を渉猟り捕へ送る獄舎に繋ぎて拷問数回に及びかども他を悪意あるものとて那折縫殿の暗躅を蹈たで快火を放ち逃去りぬるその罪同じかりしに彼岸に招ずと異なるよりも多くの左右なる程に彼岸に并に一両個の奴隷農僕の老なるに日毎の呵責に勝ざりけり。獄舎の内に身故なりければ這者と綜の本人とその它に背と一百扳撻して追放せられうとの姑麻の姫これを憐みて那折の勢につらく思惟に彼岸に二ぶ疎忽なる縫殿に自焼に及びども然びとそなるに伴りて報るに皆是言の錯誤を誰も討ずして事なれば賤しのに智慧浅ければ漫に火を放て逃とされぬの罪と竟に免るとなく

彼岸二井にその宅はのもの命を殞せし不便さよ明日は縫殿が満百の卒哭忌にも丁ぞかれば他所ながら與にも經を讀して菩提を弔ひ得させんぞと思ふこころを伝々と復市にも知らして宝珠院へ好事ありしを叮嚀に憑恐を遣し次の日に復市と奴婢二四名をつれて轎子にうち乗りて那女僧院へ詣墓参して讀經の間姑麿姫は本堂の傍なる伊豫簾を垂る内に在りつらくと見亘すに兼塵に掛る漆牌に丁丑年五月廿八日夜八ッ時出生の女子痘難解除の祈禱七月廿九日より八月五日まで願主楠氏と白黒をもて寫したりあるゆゑに此にぞ法苑果て客殿にて住持智圓尼と晤譚の折四表八表の語次に那兼塵に掛られたる漆牌のことを問ふに智圓尼听々微笑ておん身はいまだ知らじ那は叔父公正直主の息女若古子小姐がありし此痘瘡にて命危かりし折尼が祈禱を憑まれて本尊延命地藏菩薩に七日祈念し侍りしが果して利益ありて日數のごとく瘥りありしよりてその生年月を忘るな與に寫して侍るなり折々侍りし今番に限る所なるあらんどなどに姑麿姫稍悟りて若古子は奴家と同庚なるその豫ざされども誕生月と日と時は御牌によりて初て知れり那少女は今茲まで痘瘡を未だ果さで

かし秩小爺の久しくえせありし奴は是等の障りありけんを毫も知せられざれば我従父女弟の病着ありしを御寺へ詣でけふ初て少し知るは反覆も恥しくてそ侍るなれと陪話るを智圓尼慰めて然なる宜ひそ世の鄙語に燈臺遠て下暗しとかは是等の故にていへばなるべし當寺の延命地藏尊はかねて女人に御利益あなる先住智正大禪尼は稚なかりし時大病にて十死一生なりけるを這里の御佛に救れて遂に本復ありしければその佛恩を報せん與に女僧になりしとぞかかる是なる身の伯母御なれば豫め知りて居らるべし現世の利生灼然なれば身後の引接勿論なれ追薦の亡者達隅屋氏夫妻彼岸二の每孰か成佛せざるべき深信なおはせと鼻養鐘めかして示さるる姑麿姫は恭しく応をりてその言果て辭別して立て折を智圓禪尼は遽しく昨日贈られし讀経料の鈔を餉すとて知客の女僧を先に立して玄関近く送りたり恁て又姑麿姫は轎子にうち乗りて宿所へかへる程まはまぐと思ひ約莫人の本命は生れし年月日時の枝幹を神にも訟佛にも告て冥福を祈るのあるに宝珠院にてみる若古子が本命は十幹兄弟を用ひるし七月の數日の數を寫着されしはあるなね意ふに八字生來とかことを知ぬにてもと心に撥し宿

てんろう書院 吉岡町

考へ所ゆ還らぐその甲夜の間ゆ惜字箱る。十六年以前る。応永四年丁丑の舊暦を索ひ出ーく。獨燈燭の下ゆ撿ーくありゆ。這年五月二十八日ゆ小暑六月の節ゆて。即丁未の月と又二十八日ゆ是辛未の日ゆ。這暁八鼓ゆ巳丑の時ゆ當れり。信れば苦子の八字生来ゆ丁丑丁未辛未巳丑ゆ本命るゆ疑ひる。我身も同庚ゆれども。壬子の月乙巳の日巳卯の時ゆ生れーるべ八字の吉凶大く異る。苦子ゆ八字を考るゆ丁丑丁未ゆ比冲ゆ是凶。信れば年と月と応ーかゆ。又年ゆ丁丑と日の辛未と。天尅地冲ゆ凶。但年ゆ丑と時の丑と比肩ゆれば凶ゆ。女ゆ男ゆ愛ーるゆも忌るゆも元容止の美と醜ゆるのゆるゆ他ゆ素より美人ゆあーぞ然ると痘瘡ゆ損れるべ疵ゆ。憂ーるべーと痛ーゆとるゆと人を忘ゆ身の不ゆーさゆ十寸穂の芒色ゆ生て秋風戦ぐ蓼鳴く。虫の音ゆけぞ殺氣ゆ。怪ーゆ。今宵ゆ事ゆんと。呆めゆ人ゆ告ぞ獨睡ーで小夜深るゆぞ此ゆ由断せざるゆ畢竟姑麻る姫ゆ。今宵の先見差ぞゆ。又甚麻るゆ事ゆある。その巻を更て這次ゆ解分ると聴ねかー。

開巻驚奇俠客傳第三集巻之四終